の「評判の牡丹はどれどれにかな」に添える。文政版発句集、座五「する子哉」。七番日記（15・12）、「是程と牡丹の仕方する子哉」。希杖本句集、「これほどゝ牡丹の仕方する子哉」「こらほどゝ牡丹のしかたする子哉」。文政九・十年句帳写（文政9）、「こらほどゝ牡丹の仕方する子かな」。

○てもさても福相のぼたんかな

(出) 文政句帳（文政7・6）

㊟ 文政版発句集、上五「てもさてもても(衍)」

○通路に階子わたすや杜若

(出) 文政句帳（文政8・4）

㊟ 文政版発句集、上五「通ひ路に」。座五「かきつばた」。

二十四年栄花只一夜夢

○善尽し美を尽してもけしの花

(出) 文政版発句集初出

桑の木は坊主にされてけしの花

(出) 八番日記（文政3・4）

㊟ 中七「坊主さ(に)されて」。梅塵本、中七「坊主にされて」、文政句帳（文政5・4、6・4＝重出）、座五「かんこ鳥」。文政句帳（7・夏）、上五「桑の木や」。座五「かんこ鳥」。

○けしさげて群集の中を通りけり

(出) 文政版発句集初出

㊟ 文政版発句集、上五「芥子さげて」。文政句帳（文政8・4）、上五・中七「けし提てケン嘩の中を」。

㊟ 七番日記（文化13・4）、前書「於関之亭」。上五「鶯が」。

永日にかわく間もなし誕生仏

(出) 八番日記（文政2・4）

㊟ 八番日記、前書「八日」。上五・中七「長の月にかは（わ）く間〔も〕なし」、梅塵本八番日記、前書「八日」。上五・中七「長の日にかは（わ）く間もなし」。おらが春・希杖本句集、前書「四月八日」。上五・中七「長の日をかは（わ）く間もなし」。発句鈔追加、上五・中七「ながの日をかは（わ）くまもなし」。

雀子もおなじく浴る甘茶かな

(出) 八番日記（文政2・4）

㊟ 中七「同じく浴る」。七番日記（文化12・4）、「雀子がざく／＼浴る甘茶哉」。同（15・4）、「雀らがざぶ／＼浴る甘茶哉」。

馬の子が口さん出すや杜若

(出) 八番日記（文政2・4）

㊟ 中七以下「口さん出スやかきつばた」。七番日記（文化15・9）、上五「馬の子や（が）」。座五「柿紅葉」。

扇にて尺をとらせる牡丹かな

(出) 嘉永版発句集初出

㊟ 八番日記（文政2・9）・文政句帳（文政7・5）、中七以下「尺を取たるぼたん哉」。

葉隠れの赤い李になく小犬

(出) 板本発句題叢・発句鈔追加

㊟ 発句題叢、上五・中七「葉がくれの赤い李を」。発句鈔追加、「葉がくれの赤へ（い）李を鳴小犬」。中七「李に」の「に」は「を」の誤記か。

大江戸やおめずおくせず杜若

(出) 嘉永版発句集初出

㊟ 七番日記（文化12・6）、前書「勇」。上五「江戸入や」。座五「時鳥」。稿本発句題叢、上五「大江戸も」。座五「時鳥」。希杖本句集、座五「時鳥」。発句鈔追加、前書「勇」。上五「江戸入や」。座五「郭公」。

朝がほにはげまされたる夏書かな

(出) 稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加

㊟ 発句題叢以下いずれも座五「夏書哉」。

渋柿のしぶ／＼花になりにけり

(出) 嘉永版発句集初出

㊟ 七番日記（文化11・4）・句稿消息、中七以下「しぶ／＼花の咲にけり」。稿本発句題叢・希杖本句集、中七以下「花のしぶ／＼咲にけり」。発句鈔追加、中七以下「しぶ／＼花と成にけり」。

○隠家や死ばすだれの青いうち

(出) 稿本発句題叢・希杖本句集

㊟ 発句題叢、上五・中七「かくれ家や死なば簾の」。希杖本句集、中七「死なば簾の」。文政版発句集、上五「かくれ家や」。文化句帳（文化2・5）、上五・中七「身一ッや死なば簾の」。

○夕かげや駕の小脇の夏花持

(出) 稿本発句題叢・希杖本句集

㊟ 発句題叢、上五「夕陰や」。

○是ほどのぼたんと仕かたする子かな

(出) 七番日記（文化15・4）・たねおろし

㊟ 七番日記（15・4）、上五「是程の」。座五「する子哉」。たねおろし、中七以下「ぼたんの仕方する子哉」「正風院庭前」として、素鏡

7)、中七以下「片手広げる棚経哉」。文政版発句集、上五「としとへば」。座五「ころもがへ」。

○けふの日や替てもやはり苔衣

(出) 七番日記(文化10・4)・志多良

(注) 志多良、別に「五月廿一日張行」と前書して、この句を立句とした大綾・知洞との三吟歌仙を収める。

○立ながら綿ふみぬいて出たりけり

(出) 句稿消息

(注) 句稿消息、成美評「妙」。七番日記(文化13・4)、中七「綿引抜て」。

文虎が妻身まかりけるに

○おりかけの縞目にかゝる初合(袷)

(出) 文政版発句集初出

小児の行末を祝して

○たのもしやてんつるてんのはつ袷

(出) 七番日記(文化13・3、4=重出)・おらが春・希杖本句集

(注) 七番日記(13・3)・希杖本句集、前書「小児の成長を祝して」。七番日記(13・4)、前書ナシ。おらが春、座五「初袷」。七番日記(11・4)、上五「金時が」。座五「袷かな」。

○春日野の鹿に嗅るゝ袷かな

(出) 文化六年句日記(6・4)

(注) 中七「鹿にかゞるゝ」。文政版発句集、座五「袷哉」。

南無あみだどてらの綿よひまやるぞ

(出) 句稿消息

(注) 句稿消息、上五「しんぼした」・座五「隙やるぞ」として、上五を朱にて抹消して、上欄に「長らくの」「なむあみだ」と記し、さらに「長らくの」を朱にて抹消する。七番日記(文化11・4)、「しんぼしたどてらの綿〔よ〕隙やるぞ」。希杖本句集、前書「綿貫」。上五「長々の」。座五「隙やるぞ」。

人らしく替もかへ(け)たり苔衣

(出) 句稿消息・稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加

(注) 句稿消息、中七「かくもかへけり」。発句鈔追加、中七以下「かへもかへけりこけ衣」。七番日記(文化11・4)、座五「麻衣」。嘉永版発句集、中七の「たり」は「けり」の誤記であろう。

草 庵

其門に天窓用心ころもがへ

(出) おらが春・梅塵本八番日記(文政3)

(注) おらが春・梅塵本八番日記、座五「ころもがえ(へ)」。文政句帳(文政5・8)、中七以下「〔天〕窓うつなよ菊畠」(〔窓〕の右傍に「アタマ」とルビ)。

ふだらくや赤い袷の小順礼

(出) 八番日記(文政2・4)・希杖本句集・発句鈔追加

(注) 発句鈔追加、上五・中七「補陀落や赤へ(い)袷の」

大山詣

○四五間の木太刀をかつぐ袷かな

(出) おらが春

(注) 八番日記(文政2・9)、前書ナシ。上五「三間の」。文政版発句集、座五「袷哉」。

○鶯のほゝと覗くや花御堂

(出) 句稿消息

立在郷哉」。希杖本句集、座五「在郷哉」。

地　獄

○夕月や鍋の中にて啼田にし

(出) 九日集（文政8序）

㊟ 中七以下「鍋の中にも鳴田にし」、七番日記（文化9・2）、前書「六道」。「鳴田螺鍋の中ともしらざるや」。七番日記（12・6）、前書ナシ、以下同「魚どもハ桶としらでや夕涼」。句稿消息、「魚どもや桶ともしらで夕涼み」。八番日記（文政2・6）、「おどる魚桶とおもふやおもはぬや」。おらが春、「魚どもや桶ともしらで門涼ミ」。

餓　鬼

○花散や呑たき水を（はの誤記か）遠霞

(出) 文政版発句集初出

㊟ 上五「花ちるや」。株番、上五・中七「花ちるや呑たき水は」。株番、「題六道」として、「地獄」「世の中は地ごくの上の花見哉」以下の鶏老との付合を収む。これはその第二。七番日記（文化9・2）にも、「ちる花や呑たい水も遠がすみ」（前書ナシ）。

畜　生

○散花に仏とも法ともしらぬ哉

(出) 七番日記（文化9・2）・株番

㊟ 七番日記、前書ナシ。上五「ちる花に」。株番、「題六道」の第三。

修　羅

○声〳〵に花の木陰のばくちかな

(出) 文政版発句集初出

㊟ 座五「ばくち哉」。

人　間

○咲花の中にうごめく衆生かな

(出) 七番日記（文化9・2）・株番・浅黄空・自筆句集

㊟ 七番日記・自筆句集、前書ナシ。浅黄空、前書「人間界」。表記は七番日記以下いずれも上五「さく花の」。座五「衆生哉」。株番、「題六道」の第五。

天　上

○霞日やさぞ天人の御退屈

(出) 株番

㊟ 上五、文政版発句集とも「かすむ日や」。株番、「題六道」の第六。

夏の部

○下谷一番の顔してころもがへ

(出) 七番日記（文化10・4）・志多良・句稿消息

㊟ 七番日記・志多良・句稿消息、前書「手まり唄」。志多良・句稿消息・文政版発句集、座五「更衣」。浅黄空・自筆句集、前書ナシ。座五「梅の花」。

○おもしろい夜は昔なり更衣

(出) 句稿消息・希杖本句集

㊟ 句稿消息、中七「夜は昔也」。七番日記（文化11・4）、上五・中七「遊んだる夜は昔也」。

○年とへば片手出す子や更衣

(出) 七番日記（文化15・4、12・重出）・おらが春

㊟ 七番日記（15・4、21）、上五「としとへば」。七番日記（15・4）、中七「片手出子や」。おらが春、上五「年問へば」。七番日記（12・

若草や北野参りの子供講

(出) 八番日記（文政2・2）

(注) 上五「わか草や」。座五「子ども講」。梅塵本の表記は嘉永版発句集に同じ。

○はるの日の入所なり藤の花

(出) 文政版発句集初出

(注) 上五「春の日の」。

東西の花に散たてられて、こゝろも山にうつりゆくといふ日は三月廿日なりけり

○煤くさき笠も桜の降日かな

(出) 花見の記（文化5・3）

(注) 前書の表記に異同あり。文化句帳（5・3）、上五「煤くさひ（い）」。座五「咲日哉」。

○君が代の大めし喰ふて桜かな

(出) 文政版発句集初出

(注) 中七以下「大飯喰ふてさくら哉」。

根岸にて

○山吹をさし出しさうな垣根かな

(出) 我春集（文化8）

(注) 我春集、中七以下「さし出シさうな垣ね哉」。七番日記（文化8・3）、前書「根岸」。中七以下「さし出し顔の垣ね哉」。

○惣々にきげんとらるゝ蚕かな

(出) 文政版発句集初出

(注) 七番日記（文化15・3）、上五「村中に」。座五「蚕哉」。だん袋、上五「村中ニ」。自筆句集、上五「内中に」。

○さまづけに育られたる蚕かな

(出) 七番日記（文化15・3）・だん袋・自筆句集

(注) 七番日記・だん袋・自筆句集、座五「蚕哉」。八番日記（文政3・6）、上五・中七「さま付に育上たる」。

○やよしらみ這へ〳〵春の行方へ

(出) 七番日記（文化11・3）・句稿消息

(注) 七番日記・句稿消息、上五「やよ虱」。

茶もつみぬ松も作りぬ丘の家

(出) 稿本発句題叢・発句鈔追加

(注) 発句題叢、上五・中七「茶もつミぬ松も作りぬ」。発句鈔追加、中七「松もつくりぬ」。嘉永版発句集、中七「杉」にも見えるが、「松」と読むべきであろう。

舞〳〵や翌日なきはるを笑ひ顔

(出) 発句鈔追加

(注) 発句鈔追加、中七「翌日なき春を」。文化句帳（文化2・3）、中七以下「翌なき春を顔を（ママ）染て」。稿本発句題叢、中七以下「翌なき春をむり笑」。希杖本句集、中七以下「翌なき春をむら笑」。

ゆさ〳〵と春が行ぞよ野辺の草

(出) 七番日記（文化8・3）・我春集・稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加

(注) 七番日記、座五「のべの草」。我春集、座五「野べの草」。

陽炎の内からもたつ浅生かな

(出) 文化句帳（文化2・1）

(注) 中七以下「内からも立葎哉」。稿本発句題叢、中七以下「内からも

りしに、幸、懐に五元集といふものゝあれば、これ究竟の句相手なり。

○桜〳〵と唄はれし老木かな

(出) 八番日記(文政2・2、3重出)・おらが春・文政二年二月十五日付李園あて書簡

㊟ 八番日記、前書ナシ。「さくら〳〵と唄れし老木哉」。おらが春、前書ナシ。「さくら〳〵と唄はれし老木哉」。書簡、前書ナシ。中七以下「諷れし老木哉」。文政版発句集は、この文・句の間に後出「小坊主や」の句をはさむ。なお、この前文は「花見の記」(文化5・3)の一部が混入したもの。「花見の記」ではこの文に「小坊主や松にかくれて山桜」(其角)と後出の「小坊主や親の供して山桜」(一茶)を付す。

○一夜さに桜はさゝらほさらかな

(出) 浅黄空・自筆句集

㊟ 浅黄空・自筆句集とも、上五「一夜に」。座五「ほさら哉」。浅黄空、前書「夜来風雨声」。

○下〴〵に生れて夜もさくらかな

(出) 七番日記(文化8・1)・稿本発句題叢・希杖本句集

㊟ 七番日記、前に「梅干のしはびたる老法師が」ではじまる文あり。座五「さくら哉」。発句題叢、中七「生れ〔て〕夜も」。希杖本句集、座五「桜かな」。文政版発句集、座五「さくら哉」。我春集、前に「木母寺の鐘晩をつげて……梅干のしはびたる老法師が」(七番日記と同趣)ではじまる文あり。中七以下「生れて桜〳〵哉」。

○小坊主や親の供して山ざくら

(出) 花見の記(文化5・3)

㊟ 花見の記には、「けう(ふ)は町隣なる麻美と前の日より約し置けるにかれさはりありてやみぬ。さはとて翌の命持ものかはと、ただ独来たりしに、幸、懐に五元集といふものゝあれば、是究竟の句相手也」と記して、「小坊主や松にかくれて山桜　其角」とともにこの句を収める。「桜〳〵と」(前出)の注を参照されたい。

鞦韆戯

○ふらんどや桜の花を持ながら

(出) 文政句帳(文政7・2)・ほまち畑(文政7・1)・たねおろし(文政8板)

㊟ 文政句帳、座五「もちながら」。ほまち畑、一茶・栗之・文虎の三ツ物。「文政七年申正月二十九日」とある。たねおろし、前書「鞦韆(和名由左布利 里言布良武抒)」。座五「もちながら」。文政版発句集、座五「もちながら」。

桜草といふ題をとりて

○我国は草も桜を咲にけり

(出) 稿本発句題叢・随斎筆紀・希杖本句集

㊟ 発句題叢、前書「桜草」。上五「我国〔は〕」。随斎筆紀、前書ナシ。上五「我国〔は〕」。文政版発句集、中七「草もさくらを」。

○今すこしたしなくもがな菫草

(出) 享和句帳(享和3・12)・七番日記(寛政元年ヨリ文化六年迄)・浅黄空・自筆句集・希杖本句集

㊟ 享和句帳・浅黄空・自筆句集、中七以下「たしなくも哉」。七番日記、上五「今少」。文政版発句集、中七以下「今少したしなくも哉」。

○百両のいしにつりあふつゝじ哉

(出) 文政版発句集初出

㊟ 文政句帳(文政8・4)、中七「石にもまけぬ」。

○桜へと見えてじん(ぢ)〳〵ばしより哉
(出) 七番日記（文化15・9）・八番日記(文政2・1)・おらが春・浅黄空
(注) 八番日記、中七以下「見へてじん(ぢ)〳〵端折かな」。おらが春・浅黄空、中七以下「見へてじん(ぢ)〳〵端折哉」。

○一本は桜もちけり娑婆の役
(出) 文化六年句日記（6・3）・希杖本句集
(注) 文化六年句日記、座五「娑婆〔の〕役」。文化三—八年句日記写(6・3)、上五・中七「一本の桜持けり」。文政九・十年句帳写(9・春)、上五・中七「一本のさくら持けり」。

○此やうな末世を桜だらけ哉
(出) 七番日記（文化11・2）・ほまち畑（文化11・2）・株番・随斎筆紀・自筆句集・文化十一年三月二十四日付斗囿あて書簡
(注) 七番日記・ほまち畑・書簡・文政版発句集、座五「だらけ哉」。自筆句集、中七以下「末世〔を〕桜だらけ哉」。希杖本句集、「此やうに末世を桜だらけ哉」。

○人声にほつとしたやら夕ざくら
(出) 七番日記（文化11・2）・自筆句集・希杖本句集
(注) 七番日記以下、いずれも座五「夕桜」。希杖本句集、前書「群つゝ人の来るのみぞと西上人叱り給ひぬ」。浅黄空、前書「木母寺夕暮」。座五「ちる桜」。

○気に入た桜のかげもなかりけり
(出) 三韓人(文化11・冬至日序)・句稿消息・稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加
(注) 三韓人、前書「三月十日此辺の山ぶみして」。中七「桜の蔭も」。句稿消息、成美評「おもひしまゝの山里もがなとねがはれ候。兼好法師の心にもおもひ合せ候」。発句鈔追加、前書「三月十日古郷の辺りの山踏して」。希杖本句集、上五「思ふやうな」。

花守や夜は汝が八重ざくら
(出) 稿本発句題叢（文政3）
(注) 上五「花守りや」。座五「八重桜」。

袖たけの初花桜咲にけり
(出) 文化句帳（文化1・2重出）・稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加
(注) 発句題叢・希杖本句集、中七「初花さくら」。発句鈔追加、中七以下「はつ花桜さきにけり」。

山桜皮を剝れて咲にけり
(出) 句稿消息（文化11）
(注) この一句、墨にて抹消。

傘にべたりと付し桜かな
(出) 句稿消息（文化10）
(注) 座五「桜哉」。成美評「上々吉」。七番日記（文化10・3）、中七以下「べたり〳〵と桜哉」。

天からでも降たるやうに桜かな
(出) 株番（文化9・2）・文政句帳（文政5・閏1）
(注) 株番、座五「桜哉」。文政九・十年句帳写（文政9）、「天からも降たるやうなさくら哉」。希杖本句集、上五・中七「天からも降たるやうな」。

けふは町隣なる麻美と、前の日より釣(約)し置けるに、かれさはりありとて止ぬ。さはとて翌の命待ものかはと、たゞひとり来た

㊟ 七番日記・句稿消息・浅黄空・文政版発句集、中七以下「いたし
に行や花の陰」。多羅葉経、前書「花さくら」。自筆句集、中七以下
「致しにいくや花の陰」。

刈萱堂

○花の世は地蔵ぼさつも親子かな

（出） 文政版発句集初出

㊟ 文政版発句集、座五「親子哉」。七番日記（文化15・3）・だん袋、
中七以下「仏の身さへおや子哉」。浅黄空、中七「仏の身さへ」。自
筆句集、前書ナシ。「花の世〔は〕石の仏〔も〕親子哉」。文化十五
年二月二十日付希杖あて書簡、前書「かるかや堂」。中七「仏の身に
も」。

○花の木のもつて生れた果報かな

（出） 希杖本句集

㊟ 中七以下「持て産れた果報哉」。文政版発句集、座五「果報哉」。
文政句帳（5・3）、中七以下「持て生〔れ〕たあいそ哉」。

大和めぐりする人に旅の真言とい
ふをさづけて

○かならずよ跡見よそはか花の雲

（出） 浅黄空・自筆句集

㊟ 浅黄空、前書「旅立ニ送」。上五・中七「必よ迹見〔よ〕そはか」。
自筆句集、前書ナシ。上五「必よ」。七番日記（文化12・11）、前書
「送雲水」。「藪の花迹見よソハカ必よ」。句稿消息、前書「大和巡り
する人に旅の真言といふをさづけて」。「藪の花迹みよそはか忘るゝ
な」（重出）。

○今の世や猫も杓子も花見笠

（出） ほまち畑（文政8・2）文政九・十年句帳写（文政9）・希杖
本句集・発句鈔追加

㊟ ほまち畑、前書「花見笠」。

○有やうは我も花より団子かな

（出） 七番日記（文化11・2）・文化十一年三月二十四日付斗囿あ
て書簡

㊟ 七番日記、上五「有様は」。座五「団子哉」。書簡、上五「有様は」。
座五「だん子哉」。浅黄空、「正直ハおれも花より団子哉」。

○苦の娑婆や花が開けばひらくとて

（出） 八番日記（文政2・10）・だん袋・自筆句集

㊟ 八番日記、中七「花が開ケば」。だん袋、座五「ひらく迚」。自筆
句集、「苦〔の〕娑婆や花〔が〕開けば開くとて」。

さる人は病気をつかふ花見かな

（出） 嘉永版発句集初出

新吉原

○行灯ではやしたてるや花の雲

（出） 文政版発句集初出

㊟ 八番日記（文政3・2）、「挑灯ではて(や)し立けり花の雲」（梅塵本、
中七「はやし立けり」）。

御所にて

○棒突が腮でをしへる桜かな

（出） 浅黄空・自筆句集

㊟ 浅黄空、前書「御所」。「棒〔突〕が腮で教へる桜哉」。自筆句集、
前書ナシ。中七以下「腮でお(を)しへる桜哉」。七番日記（文化に末尾
に、「寛政元年ヨリ文化六年迄」と注して）、前書、「御所三月三日」
中七以下、「腮でをしゆる桜哉」。

(出) 稿本発句題叢（文政3以前）
(注) 発句題叢、上五「人真似ニ」。希杖本句集、上五「人真似に」。座五「汐干哉」。浅黄空・自筆句集、上五「人並に」。座五「汐干哉」。

如病得医
○花を折拍子にとれしやくり哉
(出) 七番日記（文化15・2）・だん袋・浅黄空・自筆句集・希杖本句集
(注) 七番日記・希杖本句集、前書「如得病者医」。だん袋、前書「薬王品如得病医」。浅黄空、前書「病如得医」。七番日記、「如得病者医」と前書して、「かすむ野にいざや命のせんたくに」「温石のさめぬうち也わかなつみ」「我〳〵も目の正月ぞ夜の花」の三句とともにこの句を収める。

○花のかげ南無さん火打なかりけり
(出) 浅黄空・自筆句集
(注) 浅黄空、上五・中七「花の陰なむ三火打」。自筆句集・文政版発句集、上五「花の陰」。

○かう活て居るもふしぎぞ花の陰
(出) 七番日記（文化7・2）
(注) 上五・中七「斯う活て居るも不思儀(議)ぞ」。文政版発句集、上五「斯う活て」。

三月十七日保科詣
○花ちるやとある木陰も小開帳
(出) おらが春
(注) 前書「三月十七日ほしな詣」。七番日記（文化15・3）、座五「開帳仏」。自筆句集、上五「花さくや」、座五「開帳仏」。

○人撰(選)して一人りなり花の陰
(出) 文政句帳（文政8・1）
(注) 中七「一人也」。文政版発句集、中七「一人なり」。

○おとろへや花を折にも口まげる
(出) 七番日記（文化14・10）・浅黄空・自筆句集
(注) 七番日記以下、いずれも座五「口曲る」。

○花の木に鶏寝るや浅草寺
(出) 文政句帳（文政8・9）

観音奉納
○只たのめ花もはら〳〵あの通り
(出) 文化六年句日記（文化6・3）
(注) 前書「観音法楽」。上五・中七「たゞ頼め花ははら〳〵」。

○山の月花盗人を照し給ふ
(出) 八番日記（文政2・1）・おらが春
(注) 八番日記、中七以下「花ぬす人をてらし給ふ」。おらが春、中七以下「花盗人をてらし給ふ」。

○花のかげあかの他人はなかりけり
(出) 八番日記（文政2・3）・おらが春・文政二年二月二十五日付李園あて書簡
(注) 八番日記、上五・中七「花の陰あかぬ(の)他人は」。おらが春・書簡、上五「花の陰」。

○堪忍をいたしにゆくや花のかげ
(出) 七番日記（文化11・3）・句稿消息・浅黄空・多羅葉経（文政1）・自筆句集

㊥　浅黄空・自筆句集・希杖本句集
㊟　希杖本句集、前書「月をめで花にかなしむは雲の上人の事にして」。

○我宿は何にもないぞ巣立鳥
㊥　七番日記（文化10・1）・志多良・句稿消息
㊟　句稿消息、成美評「無味の味、感心」。

○好々や此年よりをよぶこどり
㊥　文政句帳（文政7・3）・自筆句集
㊟　文政句帳・自筆句集・文政版発句集とも「好〱や此としよりを呼子鳥」。

塊もこゝろおくかよ巣立鳥
㊥　文化句帳（文化2・2）・稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加
㊟　文化句帳・発句題叢、中七「心おくかよ」、希杖本句集、中七「心置かよ」。発句鈔追加、座五「巣だちどり」。文化句帳（2・2）、上五・中七「茶畠にも心おくかよ」。七番日記（「寛政元年ヨリ文化六年迄」）、上五・中七「葉の〔音〕にも心おくかよ」。浅黄空・自筆句集、上五・中七「菜の葉にも心おくかよ」。

○手のひらにかざつて見るや市のひな
㊥　浅黄空・文政版発句集
㊟　文政版発句集、座五「市の雛」・浅黄空、中七以下「餝て見るや市の雛」。文政句帳（文政7・3）、「掌に飾て見るや雛の市」。自筆句集、「かざりてみるや布の雛」。

上巳之部

浦風にお色の黒いひい（ひ）なかな
㊥　梅塵本八番日記（文政2）
㊟　前書ナシ。中七以下「おいろの黒い雛かな」。風間本八番日記（文政2・2）、前書ナシ。中七以下「御色の馬（「黒」の誤記であろう）い雛哉」。

煤け雛しかも上座をめされけり
㊥　八番日記（文政2・2）
㊟　座五「ゆ（め）されけり」。梅塵本八番日記、座五「召れけり」。八番日記（3・3）、中七以下「いつち（「も」の誤記であろう）上座におはしけり」。

花咲ぬかた山かげに雛まつり
㊥　八番日記（文政2・2）・発句鈔追加
㊟　八番日記、「花さかぬ片山かげもひな祭り」（梅塵本も、中七「片山かげも」）。発句鈔追加、中七以下「片山かげも雛祭り」。

盃よまづ流るゝな三日の月
㊥　七番日記（文化11・1）・稿本発句題叢・希杖本句集・発句鈔追加
㊟　七番日記、前書「曲水」。中七以下「先流るゝな三ヶの月」。発句題叢、中七以下「先流るゝな三ケ月」。希杖本句集、前書「曲水」。上五以下「盃のまづ流るゝな三日の月」。発句鈔追加、前書「曲水」。中七以下「先ながるゝな三日の月」。

筆添ておもふ盃流しけり
㊥　八番日記（文政3・3）
㊟　上五・中七「ふで添て思ふ盃」。ただし、梅塵本の表記は、嘉永版発句集に同じ。

川下や果は闇とりの小盃
㊥　八番日記（文政3・3）
㊟　風間本、中七「早（果）は闇とりの」。梅塵本、中七「果は闇とりの」。

人まねに鳩も雀も汐干かな

〔研究ノート〕

嘉永版『俳諧一茶発句集』入集の句（三）

黄色瑞華

凡　例

一　一行めに、嘉永版『俳諧一茶発句集』の本文をおく。ただし、漢字はおおむね現行文字とした。また、「もとの集」（文政版『一茶発句集』）にあるものは、句頭に○印を付した。

二　二行め以下に、(出)として、初出及び他書に所収の有無を書名等によって注した。

三　句形等に嘉永版発句集と異るものがある場合、㊟以下にそれを示した。

四　嘉永版発句集の他は、主として一茶全集本により、必要に応じて一茶叢書本その他によった。例えば、『浅黄空』（叢書本）、『希杖本発句集』（荻原井泉水校訂『一茶遺稿・志多良』岩波書店）、『一茶発句鈔追加』（栗生純夫著『一茶新考』西沢書店）などがそれである。

俳諧一茶発句集

春の部（承前）

不忍の池に亀どもの菓子をねだるありさまを見るに、此節娑婆に万年の逗留もならん

永の日を喰ふや喰ずや池の亀

(出)　七番日記（文化7・2）・株番・八番日記・浅黄空・自筆句集・発句鈔追加

㊟　七番日記、前書ナシ。中七「喰やくわ(は)ずや」。株番、前書「不忍池」。中七「喰ふやくはずや」。八番日記、前書「しのぶが池に亀どもの菓子ねだる有様見るに、此苦〔の〕娑婆に万年の逗留も退屈ならん。さら也」（梅塵本「百年の留逗(逗留)も退屈なるらん」）。中七「喰ふやくはずや」。浅黄空、前書「不忍池」。中七「くふや喰ずや」。自筆句集、前書ナシ。上五・中七「長の日をくふや喰ずや」。発句鈔追加、前書「しのばずの池に亀どもの菓子ねだる有さまをみるにかゝる苦の娑婆に万年のよはひをたもつも退屈ならむ」。上五・中七「ながの日をくふやくはずや」。

永の日や牛の涎の一里ほど

(出)　八番日記（文政3・2）

㊟　上五・中七「永日や牛の涎が」。

○おらが世やそこらの草も餅になる